

「母の日記帳」

今年は父の服喪中のため、私は暮に喪中の葉書を出した。しかし、いつも代りに出してゐる母の名で出すのを忘れていた。

正月、実家に行くと母あての賀状が数枚届いていた。元気な頃に通っていた短歌教室の年下の友人たちかららしい。母は近年、認知症の気配も出ている。父亡き後、近所に住む私が毎日、母の世話に通っている。

字が下手だから恥かしい。どうせパソコンで作るんだから私のもお願い、と言われるま

また毎年、母の賀状も作っていた。しかし、
今年も父のいない寂しさを粉らわせるため、
頭の活生化のために自分でも書かせなくとは、
私は三枚の葉書を母に渡した。
「ホラ、年賀状にお母さんの口気品と美しさ
を見習いたいと思っさ」と書いてあるよ。ま、お
年玉代りにしてもサービス过剩だけぞ。明日
までに返事を書いておいてね。
上手に書けな」と表面の母に多少の不安は
感じたが、強引に葉書を置いてきた。

翌日、実家に行くとき三枚とも返事が書かれていた。読んで驚いた。上手なのだ。一昨年、夫が亡くなり、一人住いになりました。……と、理路整然と書いてある。仲の良かった友人から年賀状が届いた喜びを歌った短歌も添えられていた。

一お母さん、字も文も上手じゃないのよ

一まさか、下手ですよ

一上手だったば。字も文も名人級の私が言うのだから間違いないわ

笑いころげる母。まだ冗談が通じる。

翌日・母に日記帳を買ってきた。短歌でも

なんでもいいから・頭の訓練のために毎日、

思いついたことを書くようにと。

やがて一ヶ月。時々抜けまいる日もあるよ

うだが書いてある。なるべく見ないようにし

てゐるが、こっそり覗くところな歌が。

「会いたいとたびたすらに会いたいと

夫の写真に涙おとせりし

母の切ない願いに胸を突かれた。